

300892-000-5

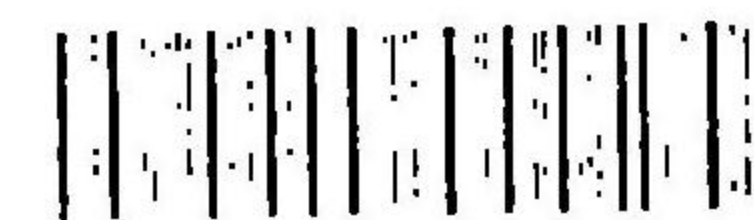
特71-623

女をしへ草 上卷

中津 衣江 / 著

M30.7

AAB-0001



女は人の世に生れしは
まゝの世に生れしは
年月の流るるに
後見より
父母の深き有るは
更の人の世に生れしは
思ふに
母の世に生れしは
早の世に生れしは

女は人の世に生れしは
まゝの世に生れしは
年月の流るるに
後見より
父母の深き有るは
更の人の世に生れしは
思ふに
母の世に生れしは
早の世に生れしは

明治廿五年十月廿九日 中津文江

女をへ草上卷

この書は吾玉聲合にて禮式の事を教ふるにまづ歌をよみ覚えさせや、に其わざに就しめんとして撰べるものおれむもえら普通よびの俗言さびごとを以て歌の体さまを作したるものありされむ言葉ことばのいそしきが上に調しらべ乃と、のはぬふも多かるをたゞ其こと習ならひ覺ゆるに便たよまよからんことを音ねとて物ものしたれむ見む人その心を得てよ

編者識

禮式の事

○出入

我勝にひて入するは無禮あり
何いさつをしてひとりく
家に上り吾はき物を直さすむ
ひとに手敷をかけるとぞ一れ

○貴人拜立居振舞

進むには敷居も縁え下よ越え
あしすり何のみ上座ひくあり
兩の手を垂てすらく進み出
六一やく前に座すせしるべし
座するには上座の足を少し引
膝まづくにつれむぎを揃へよ

下座より貴人にあふめ向合に

座すは無禮とおもひしるべし

○貴人拜

兩ひぢは膝の外すみ指さきの
ひらかぬ様にるしらさげ居る
息さん度頭しづかに兩の手を
ひらくにつれて爪さきを立つ
兩の手を膝にも膝滑し立ち
三あしさがりて上まはりゆく

○神前へ拜

ふみ揃へ引足あさす拜をおし
上あしひきて座すとしるべし
二度拜み四ひら手打て又拜し

下座しもざうかしてたつを知るべし
下座しもざより三足さんそく下りて拜はいをお
上かみにまはりて立ちかへるあり

○心得の事

貴人きじん父母ふぼものいふ時は兩膝りょうひざの
前まへに手てをつきかいらきお居ゐる
何事なにごとも遠慮えんりよは三度さんどすごいおむ
禮らいもぶれいにあるといるべし

○襖障子開閉

左ひだりにはまづ右みぎの手てに三さんをんを
あけ改あらためてひだり手てにあけ
下座しもざより敷居しきいを越こて上かみまはり
かみ足あしひきてつきひざにせよ

たてるには下しも八寸はつすんを右みぎに持もち
のこるさんむん引手ひきてひだり手て
引手ひきて無なきときは兩りょうの手て仰あが向むて
こし板いたのさんもちてあけたて

○行逢の禮

貴人きじんみぎ僧尼そうにはひだり同輩どうばいは
おあづくみぎによけ合あひてせよ

○人前を通る

貴人きじん前まへひだりのときは左ひだりひざ
あが右みぎひざとあぐめありけり
右みぎひざを下座しもざの方かたへ引ひにつれ
その膝ひざも手てしとやかにつく
右みぎひざをつきて左ひだりの膝ひざも手て

つきてるしらをさおて答へよ

○人の後を通る

後うしろから両手りょうてをかゝるくつき膝ひざ一

貴人きじんのゐたを見てとほるあり

○蓑盆持出様

灰吹はいふきもさせるをみぎに火ひは左ひだり

たむこ手前てまへにおくとしるべし

丸形まるがたは間中まなかはいふき火ひを右みぎに

たむこひざりにさせる右みぎあり

両りょうの手に据よて持ちどし客前きやくまへに

とゞいて置たきて上かみまはり行く

○間あたゝめ火鉢

相あひともれひら手に据よて横足よこあしに

かみ座ざ乃客きやくのそのゐみに置たく

○煎茶出し様

左手ひだりてに据よてみぎ手に臺たいを持ち

客きやくのしも座ざに置たくと知るべし

左手ひだりてをつきてみぎ手に客前きやくまへへ

たゞしく進まめかみまはり行く

○菓子かしの進め様

むし菓子かしは楊枝やうじを付つけて持出もちだし

正ただしくすゝめ立たちるへるあり

また盆ぼんに箸はしと紙かみを持もいで

ほどよき方かたにひかへ居ゐるべし

客速きやくすみ慮りよあらむまら紙かみ四よつに折をり

菓子かし三さんつづとせりて出だすべし

とり終て紙と盆とをもち歸り
まゝ茶を出しすゝむると知れ

○天目茶壺

兩の手ふ据てもち出し客前に
ふたとりて蓋みぎに立てかく

○炭斗へ品々くみ入様

炭どりのひざり向に胴をみを

ふぎのむかふは枝をみとれ

枝炭の前に香具を置くといれ

其あつるひをたいせつにして

中火をいひざりかまゝき筈右

鏝はおあじくかまゝきのうへ

炭つぎは常も茶の湯と心得て

其ときくゝにそのころせよ

○何品にても柄の附たる物

左手を上ふ重ねてそのうへに

柄を客のかた刃さきわがかた

○給仕人心得

茶も菓子も酌も給仕も其客の

志もよりあすを禮せしるべし

鼻かます頭もかゝる身も搔す

くさみあくびや咬もつゝいぬ

○蒸菓子後様

菓子くはは四指にわり右に持

あるばを紙のうへにのせおく

○瓜を進やう

瓜むかむ刃物も洗ひ手も洗ひ

たてよりのはを六つ半にむけ

満月にわざりにあして出べし

土ようすぎには半ぶつとくれ

○柿進やう

柿むるむ小へたをくり抜て

そこよりむき三種とりて出す

○菓物類進やう

西瓜をむとてに程能幾つにも

まあすぢのひに横にふたつに

桃はあて梨は半月くごものよ

るむかほけれむ品によるべし

蜜柑をむ四つ割あふし一門状

ひせふさとりて筋をきる取

一ふさを喰あむ種を其何とへ

まだいゝに置くせこそしれ

○菓子喰順

色々の形ち乃菓子の出あらむ

山のものよりさきにさべべし

其次は海のものありその次は

野にぬるものを喰るせどしれ

春は青夏はあかぬり秋はいろ

ふゆはくろあり土用さいろを

○野菜物たべ順

春は酢く夏は苦きに秋からし

ふゆはほからく土用あまきを

○何品にても手に持てたべる物

手にとりて喰ぬる物は左手に

人さしやびや母指につまみて

左手に物をつまみて右の手を

下より添へてとべるとぞ一れ

○熨斗三方進やう

置き熨斗は客の左にほそき方

わがもつひどり廣きるあかり

○三方持やう

三方は右手くり形ひどり手に

ひどり乃ふちを持せしるべし

○同進やう

客前にすすみ引足ぬきむし

両ひざつきて置くせしるべし

置熨斗は上座の客の下ひざを

かね合とまてちやう中央に置く

下に置少し押出しをくみぬむ

下座にゐへりひるへ居るべし

○客受け禮

客受禮受ておほまゝすすみ出

れゆのごせくにもちかへる也

○禮酒出前の吸物膳出の様

先づさきに吸物膳を上座より

志も座へ順に出すとしるべし

○銚子盃の心得

貴人よりしもへつゝはす盃は

銚子をひさく下おてもつべし
下輩より貴にんへまゐる盃は

銚子をたかくあおてもつべし
同輩は銚子をかき相ともに
たゞしくあらべ持とるべし

○盃の進やう

みぎの手に銚子をもちて盃の
臺をひだりの手のひらに据を
客前にすこし斜につさひざし
銚子みぎをかき置れてすゝめよ
兩の手にさかづき臺を客前に
すこしをかき出し和へ居るべし

○酒のつぎやう

右の手に銚子もちて左手は
くちの下にぞ添へてつぎべし

○二人にて酌の進やう

さかぬ臺箸を向にもち出して
さかづき臺とあらべ置へべし

○同着進やう

酌の酒注がむ臺をむ前まはし
右手にさかかきはさみすゝめよ
もぎのやう廻し直して退きて
ほどよきゐたに和へ居るべし

○同酌人の業

酌は客肴うけあむくはへを
銚子をまたに置けてひらへよ

三方にさるづき載らむ三方を
手前へひきてもちてとつべし

○同肴出し様

酌さるむわれもさち出肴をむ

すこし手前へひたてもち立つ

○銚子持出やう

つる右手くちの下より左手を

仰むけて添へもちいづるあり

○同酌のしやう

左膝つきて右ひざつゝぬやう

さかづき出して右ひざをつく

○禮酒終て吸物引かへ

かん酒出す前に吸物引るへて

燗酒を出してさかか出すべし

○燗酒終りて本膳出しやう

まづさきにさかか納て本膳と

すひものぜんを引るへるあり

○同吸物膳出しやう

持出してすひものぜんの上に置

すひもの引てその何とにおく

○本膳二の膳向づけ出し様

ほんぜんの右に二の膳向づけ

飯しるかへてさかづきを引く

○箸の取やう

左手をつきて右手に箸をうけ

ひどり手を添へせんに置あり

○飯こめ様

左手を飯椀にそへふたとりて

仰むけてあがみざわきにかく

○汁吸始やう

右の手をまゐる椀に添へ左手に

ふたとりておほ右あきに置く

汁椀の蓋はひざりの脇おれど

時によりてはかほるをもまれ

○本膳發順

まづ先に汁少し吸ひ下に置き

めいはふた箸たべるせぞいれ

二度目には飯をむ三箸汁のみを

すこしくたべてまゐるを吸あり

○廻りの物たべ順

中盛よ右の手先よむざりさま

つぎは二の汁むかふづけあり

ぬますをむ左手を添みを喰て

けんをも酢をも吸はぬ物あり

焼物やまおものいれや杉箱は

みやおの物とおもひするべし

○主人のもてあいの受やう

主人より挨拶あらば其たびに

主人のかたへまはりあいさつ

○飯のゐはり受やう

替りをばあさむ下座へ一禮し

みぎ手ふ椀を出すといるべし

受るにも右手に受て膳に置き

下座見あはせたべるせどいき

○重引受やう

重引は右手に右のふたを出し

みぎ手にうけて右あきにかく

○飯のかはり進やう

飯鉢の前に杓子乃柄をみぎに

つぎの間におき下に置くあり

蓋とりて右脇に置き右の手に

杓子をとりてあかへふせ置く

客前に少しあゝを膝へづき

ひざりの方に置くことあるべし

左手に枕のいとそこつまみ持

みぎ手を添へまはちに向居て

右の手に三とひ盛て又まはり

右手をつきてわたすとどしれ

○汁のかはり進やう

持出て椀のぬたせり仰むけて

客のみぎと置きといるべし

若客が蓋あさすして渡しあむ

かへ蓋あまて持ちいづるあり

○中酒進やう

盃をむかふ付とをむきかへて

銚子もちゆでさけをすゝめよ

○重引の出しやう

さかづきの壺ひざ歸り重引を

出してはたもや酒をすゝめよ

○吸物と二の膳を引かへ

吸物を持ってゝまゝ二の膳を

ひたかへてはた鈍子出すあり

○湯の出いやう

酒すゝめ吸物を引き湯と水を

もち出て湯をすゝむるといれ

○茶受の出いやう

茶受出―本膳をまた引かへて

こいちや茶受と引かへるあり

○引かへの菓子

薄茶菓子出して濃茶と引替て

薄茶いごして菓子をひくあり

○心得の事

重引は飯鉢出すをかあじあり

うまのどを順よくこゝろせよ

○中酒をかあ出―順

二度目には鈍子持出次の間に

たゞしく座して扣へ居るべし

○同はいせん

吸ものを二の膳左あゝめ置き

二のぜんひきてほんせん乃向

二のぜんの跡に吸物ぜんを置

二の膳もちてたちかへるあり

○同酌のいやう

注て後ふたゝびつぎに扣居り

客のつがふにゆくも出る
つぎをはり次に扣へて客の箸
をさむるを見て立かへるあり

○心得乃事

菓子も茶も引かへは皆同あり
るみにあらひて順をよくせよ

○吸物吸やう

左手をつきて右手に椀をとり
ひどり手に据みぎにふたをとり
吸物を喰るは汁とおあがりあり
吸ふ度ごとにふたするといれ

菓子喰やう

ふところの紙拭出して前に置

右手に菓子をとるといふべし

紙を手に左手にうけたべ終り

あまらば右のともとにどいれ

○さい肴喰る心得

飯喰すさいやさるかに移をむ

あたり箸とてはづるものあり

うで越は二の膳たべて其箸を

三四のぜんにうつすをぞ云ふ

たに越は本膳の汁二のぜんの

いるとつゞけて吸をいふあり

○箸の取やう

二つ三つ扱むはしほの重傳と

替ことぐにいやむるあり

煮豆をむ堅に挟みて一つづゝ

よこふはそむはまめの横は

○雑煮喰やう

雑煮をむ先づ上置をまこし喰

もちは箸にてはさみさるあり

祝儀には餅は喰すに上置きを

すこしくたべて替りをぞ出す

○麴類喰やう

麴類は箸に掛むにそろくど

椀のきはよりすゝるとぞしれ

○式三献後順

打あそび二献に粟を三こんは

こんぶを喰るものとしるべし

○献立

荒増の二の汁五さいこん立は

そのときくゝの人のこのみに

○二の汁五さい心得の事

汁のみは白玉くづ一ニ葉菜や

あふぎ大こんしひたけとしれ

せり牛房二葉大根しむたけや

あまづ梅やきさきみどりこん

皿のつまきさみ大根三島のり

まきはすまたえき菊しらざく

鯛ひらめ程々のりもときくゝの

菜よしせん粟きくらぶやゆ葉

あらづけや麴づけ茄子漬物も

かき多ければむとまにまるせよ

○煮物

先ちくわ蒲石こがんに山の芋

くしあすだれふ京菜かんべう

○猪口物

針いやうが春菊のりや白魚の

敷味噌またはでんぶ煮うめを

○二の汁

鱈胡椒こら、ご蛸や何にても

そのせきくのものを用ひよ

○重引中酒の肴

重引は小板かまぼこ小鳥やま

味噌づけの鯛じきにまかせて

○中酒の取物

結糸花系び鯛のうまほさど

口にはふたのとうねど、これ

○茶受

茶うけにて長命の餅川さけや

まとうむたまにむすびかん歌

ざうひ餅煮ぐるみ杯を付る也

ほか品にてもさまとおそあし

○薄茶菓子

かき取ぐさ長生殿に千代の友

また松かぜやうすこなりあり

○魚の煮焼

手前ふと海腹川背のうらをむ

ひだりに付るやうに煮やます

○ひれ乃吸物

男ふはひどりひれあり女にこ

右ひれつけて出すと一るべし

○二献の吸物

かどいりに翁のつき一皆子餅

二献さふ煮はまた子もちあり

○式三献据やう

さかづきのまへに箸あり粟左

こんぶを右に熨斗を間あかに

二こんには雑煮を前に五種左

するめをみぎに置くと知べし

三献と前にすひもの梅ひどし

かすの子右に置くと一るべし

○床飾据やう

神配据て間中一ま臺ひどり鳥

みぎには魚をるざるとぞしれ

略式は瓶子の前に熨斗すゑて

ひどりにおが柄みぎに加へを

○盃事次第

待上薦嫁をひさふひ祝儀の間

主位に座さしめ我しも座あり

○中立の人

婿いで、客位に座して媒妁は

嫁とむことのしもるたにさす

○待女薦

待女 薦床にかざりし祝ひ 熨斗
右手にせりてひだり手を添ふ
嫁進め 婿ふすゝめて床にあほ
るざり置きてぞ元の座につく

○配膳の人

配膳は二人あらびて床のまへ
てうし提子をおろすとぞしれ
提子もつ人は 籠子の口とりて
さけを提子にうつしいさべし
口をおし元にもざりて 銚子持
ひせに提子のさけをうつして
相ともし 銚子提子をもち立て
ひざりへ廻りつぎの間にゆく

さかづきと土器のもの 兩人は
まあるもちいでゝどこに据置く
初献をむ嫁と婿との前に置き
下かはらけをそろしもおく
一人はかはらけのもの 一人は
さかづきだぬを嫁まへにおく
かはらけの物は 上座の中央に
嫁とむことのひざのかねあひ

○酌人の業

提子主位 銚子は客位 並び座し
いち禮あまてひかへ居るべし
立向ひつき 膝あしてかへをし
てうしはさききに提子あどより

嫁初よめ献けんくはへをおさす婿むこに差さ

婿むこはくはへをみたびおすあり

○待上まち薦せんと配勝はいの業

さかづきを床とこに飾かざて配はいぜんは

二に献けん初しよこんをひさるへるあり

○配勝はいと酌人しやくじんの業

二にこんをむ婿むこに始はじめて嫁よめにさし

嫁よめにをさめてまたもひさかへ

○同酌どうしやく人

三さん献けんと嫁よめにはじめて婿むこにさし

よめにをさめてむすび酌しやくあり

○心得こころえの事

略式りやくしきを引ひかへおさを本ほんぜんと

二にのぜん三さんのぜんのごせくに

縦たて盛もりのうを馬うますべてかまら前まへ

横よこもりかいらひどりありけり

縦たて盛もりとみどりへまはし横よこ盛もりは

すべてひごまへ廻まわすとぞいれ

披ひら覆くわにはまはさぬ様ように持も出いでて

その儘ままそこにかくを志まるべし

山やまのもの田たはた川がはすみ馬魚うまと

披ひら露ろのいゆんはふるき習ならはせ

まん物ものに一いつ荷か一いつ種しゆはたる二ふたつ

魚うまのゐすくこのみにぞよる

ちひけいの餅もちと三さんつ目めに樽はら肴さか

添そてたがひにかくるせぞいれ

○忌言葉

薄いのとむゑんあいたと歸也

おくるもどすもいみ言葉あり

退くと切るさるやるを離ると

返をわかるゝさむるのくぬり

○心得乃事

貞と云ふ白たま椿うすさねに

つく八十米ぞ身のまもりある

細石の苔のむすまで幾千代も

かわらぬいろを守りとはせよ

嫁初一献吸加へを成さむ婿にさ

一婿は其盃にて三度加へを受二

献の盃をはゆめ是も三献加へを

受て嫁にさ一二献と三度加を受

又三献は嫁に初三度加へを受て

婿にさ又三度加へを受て嫁に

さす此時と嫁二献吸て納るあり

○心得の事

一に盃を下お二に土器を下お三

に三献を下お四に二献を下お五

に初献を下るあり

又本酌を注酌を替るく下座へ

下り加へをおして嫁に進る時は

本酌がつぎ婿にすゝむる時は注

酌がつぎて一々替るくに出進

るこそも何るあり

嫁の父より婿の父へ嫁の母より
婿の父へ嫁の父より婿の母へ嫁
の母より婿の母へ嫁乃父より婿
へ嫁の母より婿へ婿の父より嫁
へ婿の母より嫁へ

○茶之湯の事

中どおに茶入を飾り上どおに
香具をかざるつねのものあり
釜の湯の煮おを聞て風爐席へ
ひせりくにくりおむとまれ
夜咄と菓子茶せは花無ば
また座を立て手をす、ぐあり
夜咄と容の着座に菓子を出し

こい茶いごしてつぎに御飯を
又茶種の替るこい茶を出す也
客も主しんもてお、あかさん
あさ寅卯晝午ひつじ飯出しは
ひつじの時とおもひまゐるべし
菓子の湯は朝飯後の辰おれむ
おふ飯のちはひつじありけり
夜咄と酉のときあり茶乃客に
案内はあらじときあたがへそ
跡見とは客の歸て乃こる茶を
振まふおれむいらせおるべし
雪隠の戸開て何らむ冬空ても
席と風爐あり足袋はぬぐべし

水門に立寄てよく柄杓かくを

お次へ見せてとるとしるべし

極寒はぬり片くちへ湯を出す

水汲みうめであらふとぞしれ

貴人からお次を先にすべし出

くつをぬはしておへおるべし

茶座敷にふたりは立じ一の客

せこそゆけん二客いるあり

床の間の軸の真前に茶入をむ

ほんにすゑかく名ぶつせしれ

○料紙硯箱の扱

持出て紙をむ客のまへにかき

はこそ右あきかくとしるべし

若ふたの中に模様のある品は

ふた仰むけておらべれくべし

墨すりてきて蓋をおし海手前

右手に据ゑてひざり手をそふ

たにぎくに色紙巻紙ふとの上

まりのみはみおはこの下あり

○花の受取渡

本は上に草を下さる水ひきの

むすび目水草をおじあるべし

石の手の人さし指を水ひきの

おもてに掛けてもち出るあり

あひ共に右足引いていれいし

あゝすひざり手受るみぎ手に

○床飾拜見

床の前三尺さかりひざまづき
両手をまへにつきてはいけん
るけもの中主位客位順々に
といけん有てかいらさげゆく

○花の拜見

根の締り臺一んそへと順々に
はいけんありてかいらさげ行
せこかぎを拜見とみお同じ也
上にあらひてれい儀たゞしく

○掛物のけ弛やう

かけるには中主位客位弛にて
客位中主位じゆんをうるべし

左手を下にお、めに帯につけ

右手にすゑてか、へもつあり

下座より余に床ふあらび座し

軸をひざり手さをそみざわき

右の手に紐たぐりせき下に置

一もんじまでしとやかたのぶ

風帯をのびし右手に竿をもち

ひざりつりひも竿にはさみて

左手に軸の真中をみぎの手に

さをのもちとちくの辨まで

折釘にたゞしく掛て竿かいら

右手にもちてかべにたてかく

両の手に両軸持てそろくど

さぐるにつれてひざまづく也
さをもちてさん尺さがり跪き
たゞしきを見て直すとぞいれ
弛には右手に右の竿をもち床前
に跪づき軸を見て床へ上り兩膝
をつき竿を右脇に置兩手に軸を
もち巻始の如く疊み始の如く持
かへるあり

○小袖受取渡

山ひどり裾はみざふり襟向ふ
すそを四五寸さらしみつをり
披露には襟をむこふに袖は右
おくべきかたへ押おほすあり

左よりみざへくへと順々に

無紋をいたにもんつきはうへ

盛上て仕舞の袖をかへすあり

こんいん式はそでをかへさず

披露には廻さぬ様にもち出て

そのまゝそこへおくと知べし

廣ぶたをみざ手に据て左手に

ひどりの角をもちいづるあり

ひどり手のむかふを先に右向

ひどり手前にみざの手まへを

受人にさゝくむかひ一禮し

また廣ぼんのかたにむかひて

ひどり手に左の角をすこし上

みぎ手にすゑて正めんにおく
ひざり手に袖口を取右の手を
そへて手前へをりかへすあり
すこし押出して渡して一禮し
ひざりにまはり立かへるあり
兩角を兩の手にもちわが前へ
さん寸むかりひきよするあり
袖口は右手ひだり手そへ返し
またむね紋をあらはすとくれ
受には左手にうけひだりには
向居てしたにおくせしるべし
まゝ品のかさに向居て右に受
ひざりにまはり立かへるあり

無紋なら袖を返さず其まゝに
うけ取わたりするものとしれ

○辭令書受やう

宇頭を手まへに折目右におし
右手にすゑてひざり手をたふ
わたすべき方へ正しく跪ぶ
ひざり手をつき一れいをおす
兩の手をたれて此敷す、み出
渡すところへひざまづくあり
一禮し兩手をつきて扣へ居り
右手をそへてひざり手に受く

○書物拜見

右の手をつきてふた足退きて

書物はいけんするどゝるべし
元のやう疊右手をつきてまた
一れいあしてひどりまこりに
ひどり手の人き一指と母指ふ
紙をはさまんやうにもつべし
みきの手に紙の右角添もちて
たち合のかと見るとゝるべし
右足を引たゝく蹴まづき
右手をはかひだり手はひざ
左手を左のひざにもたせおき
みぎ手をつきて一れいをおす
右の手に字頭うけて手前にこ
じゆんに廻して両の手にもつ

両の手に指て少くす、み出
渡しひどりへまはりたつあり
たち向ひどもに見合せ右足を
ひきひざまづき一れいをおす
折紙をひだり手に持右の手を
そのすみにそへまづ受てとる
扱受て左のひざにもたせおき
いちれいあしてたち入とれ
○櫃臺出いやう
三つ足は上座に二つあゝ無は
しん切かけをしもざとぞしれ
二種あれば心切掛を向あひに
いく種もおおじ順と知るべし

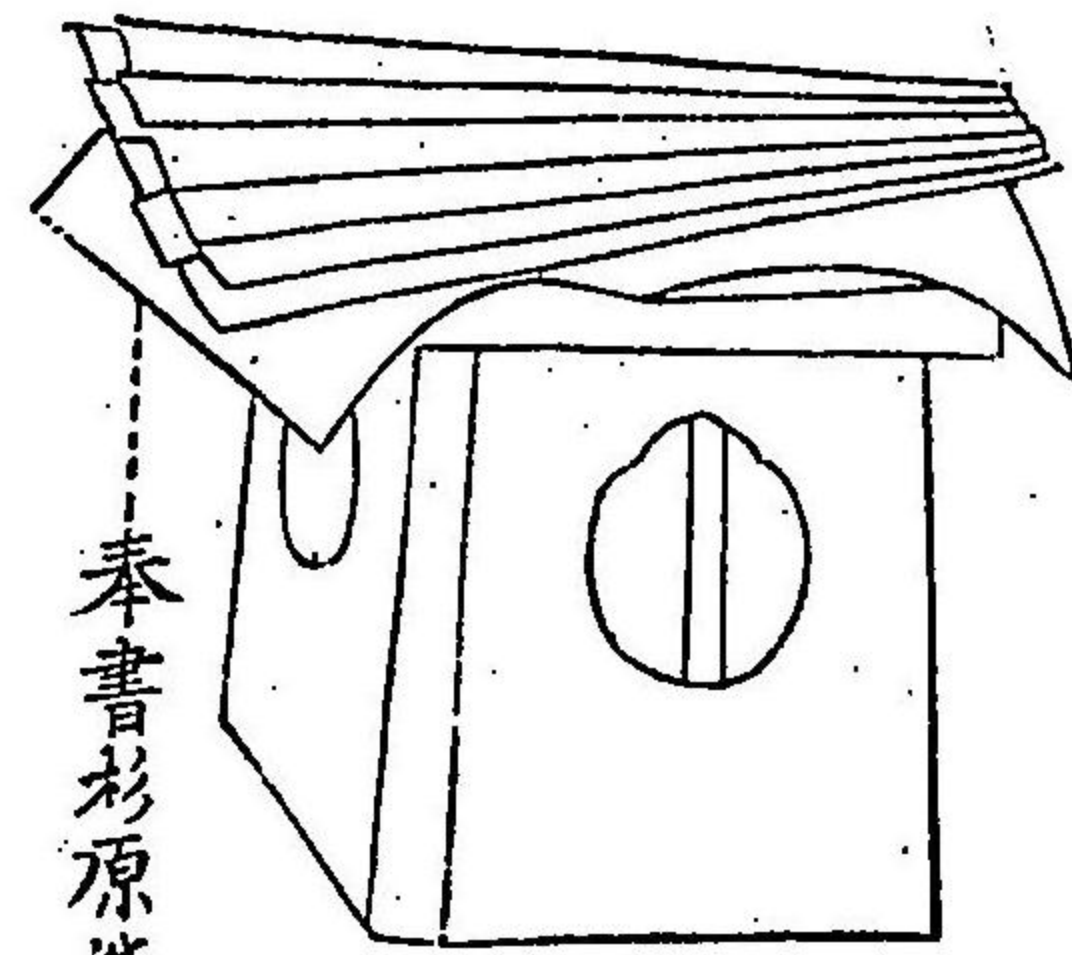
火を付てひどり手燭に替蠟を
みぎ手にもちて上座より立つ
らん蠟を右手にとりて左手へ
うつし右手にさてかへるあり
あらたある蠟に亂れの火を移
手しよくにたて、亂蠟をけす
しんきりを上に左の手に据て
母指に押して小づまみぎ手に
蠟そくを右手にとりて左手へ
うつし右手にしんをきるあり
心切らば又ほそつぎの上に置
蠟をみぎ手にさつといるべし
今は皆らんぶありせむ其品の

形ちよく見てそさうあきやう

三方にのしをすゑるふは如此
細き方を人の左の方にすべし

鬘斗三方の
すゑやう

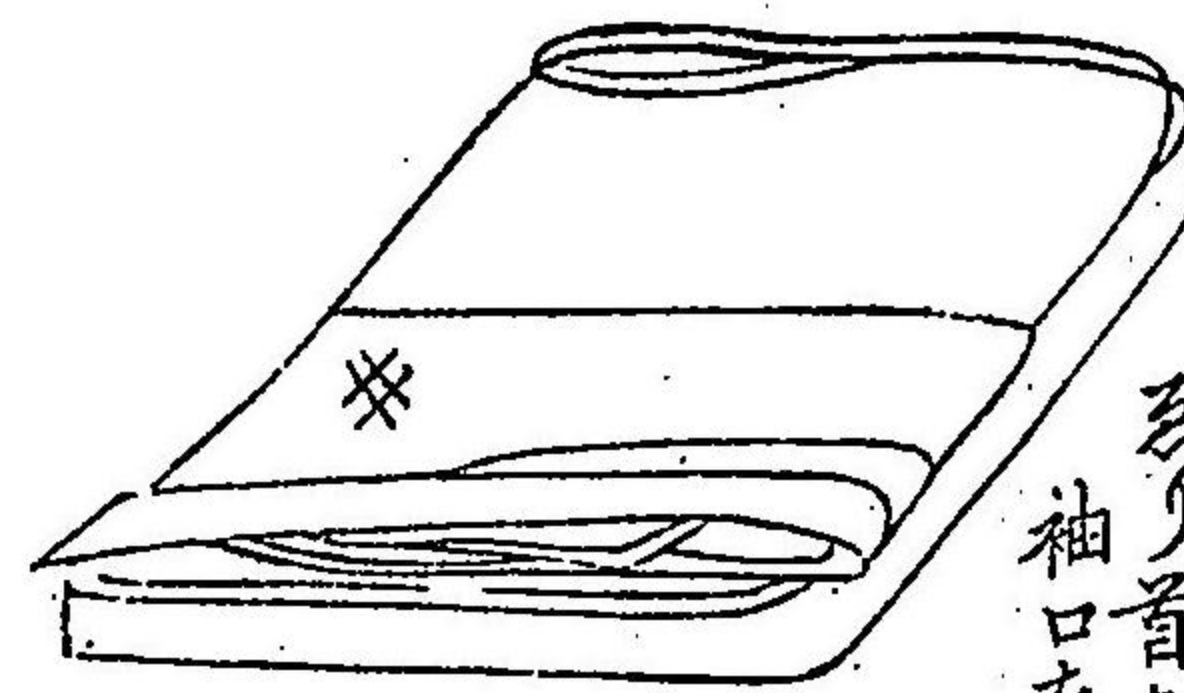
鬘



奉書杉原藏

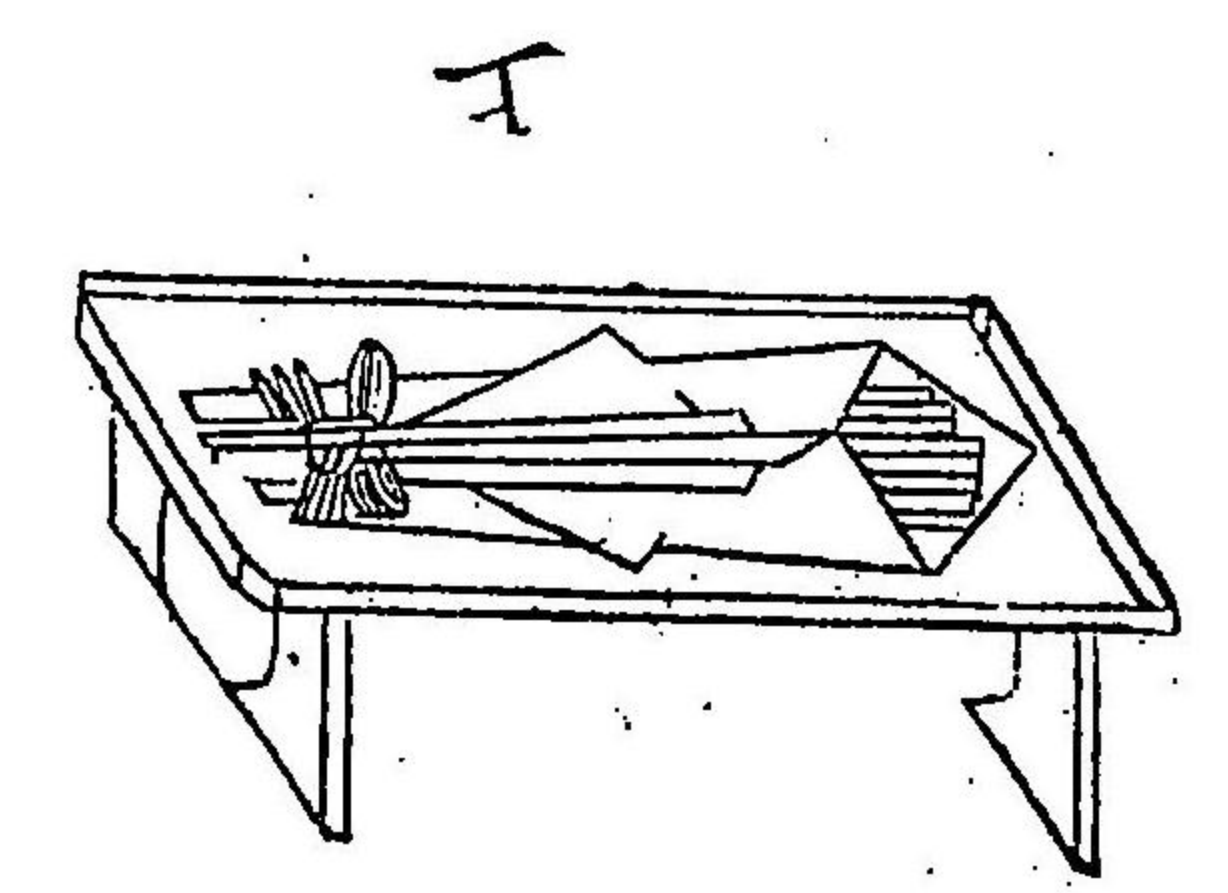
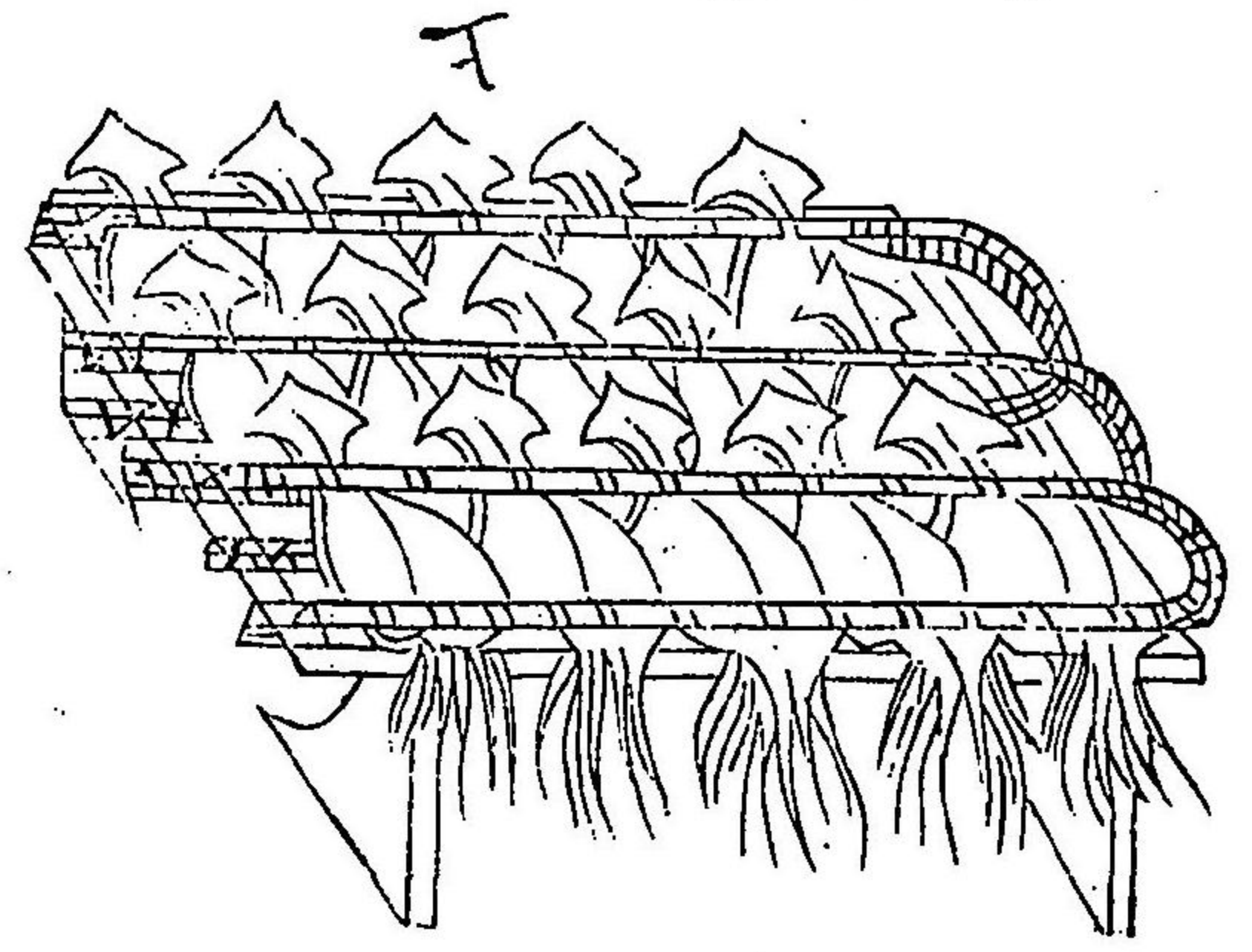
小袖をひろ
ぶたにもり
やう

下

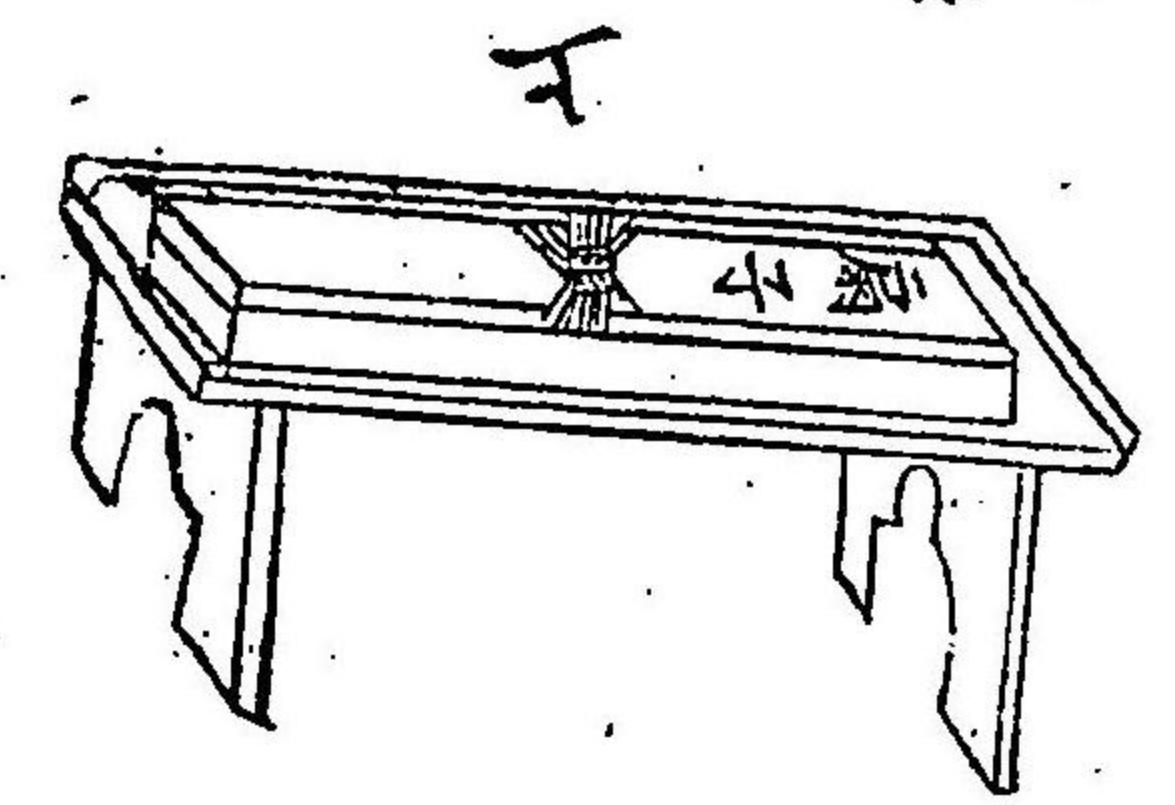


人小渡をこまにハ如此
ゑり首を左にすし
袖口を向ふやうに
出まをり

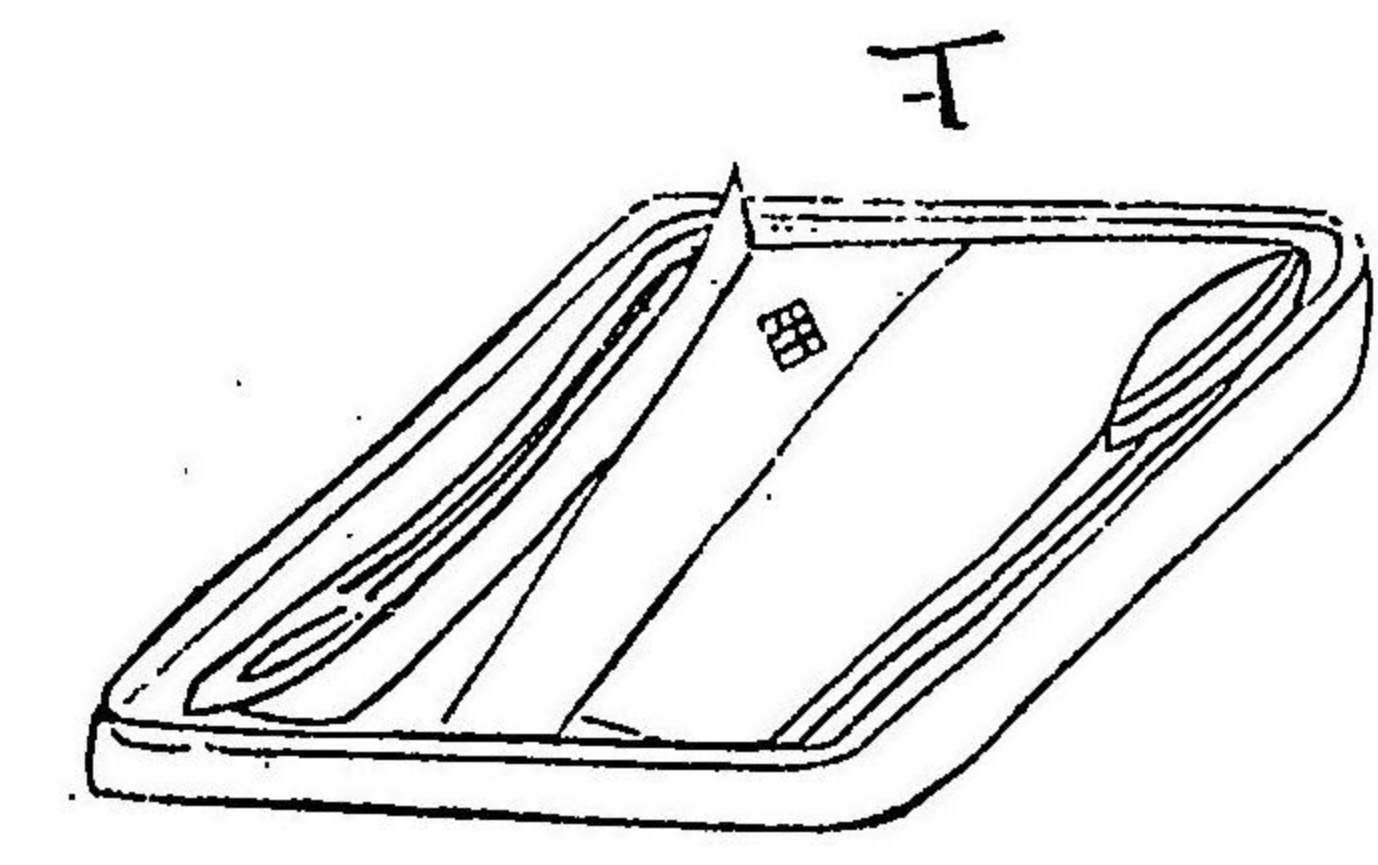
据を壽
様のる



据扇の
様の

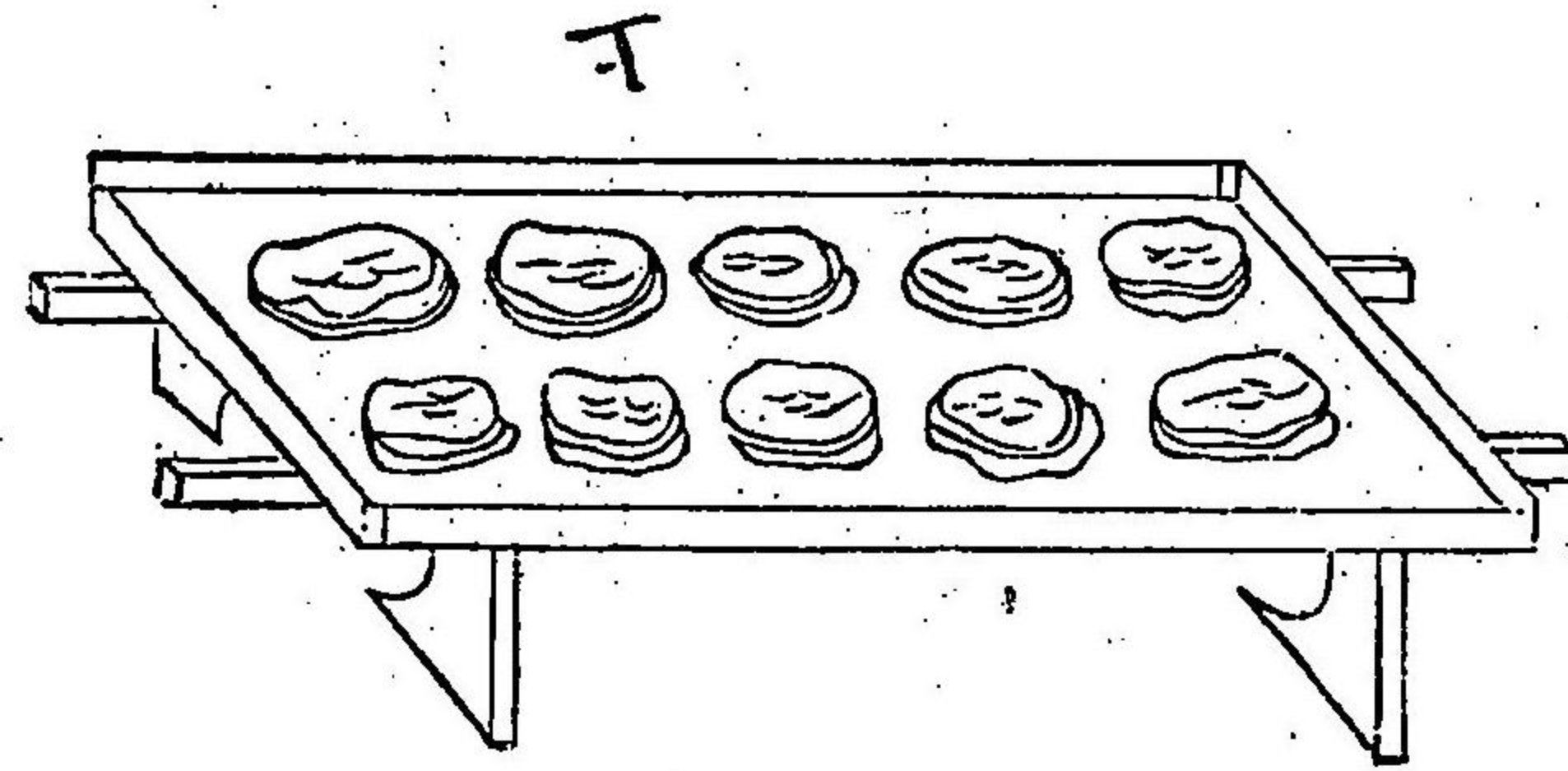


其二

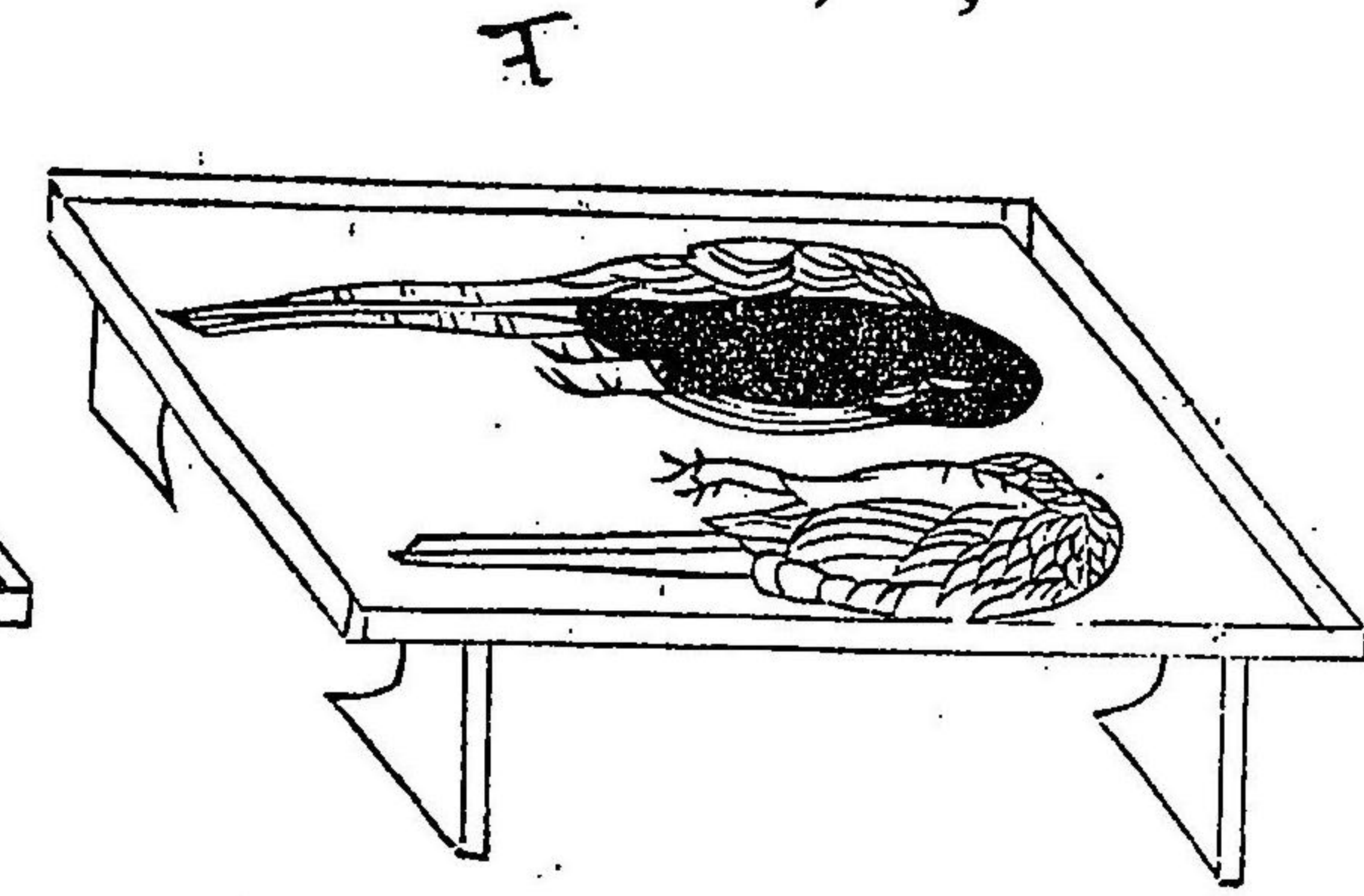
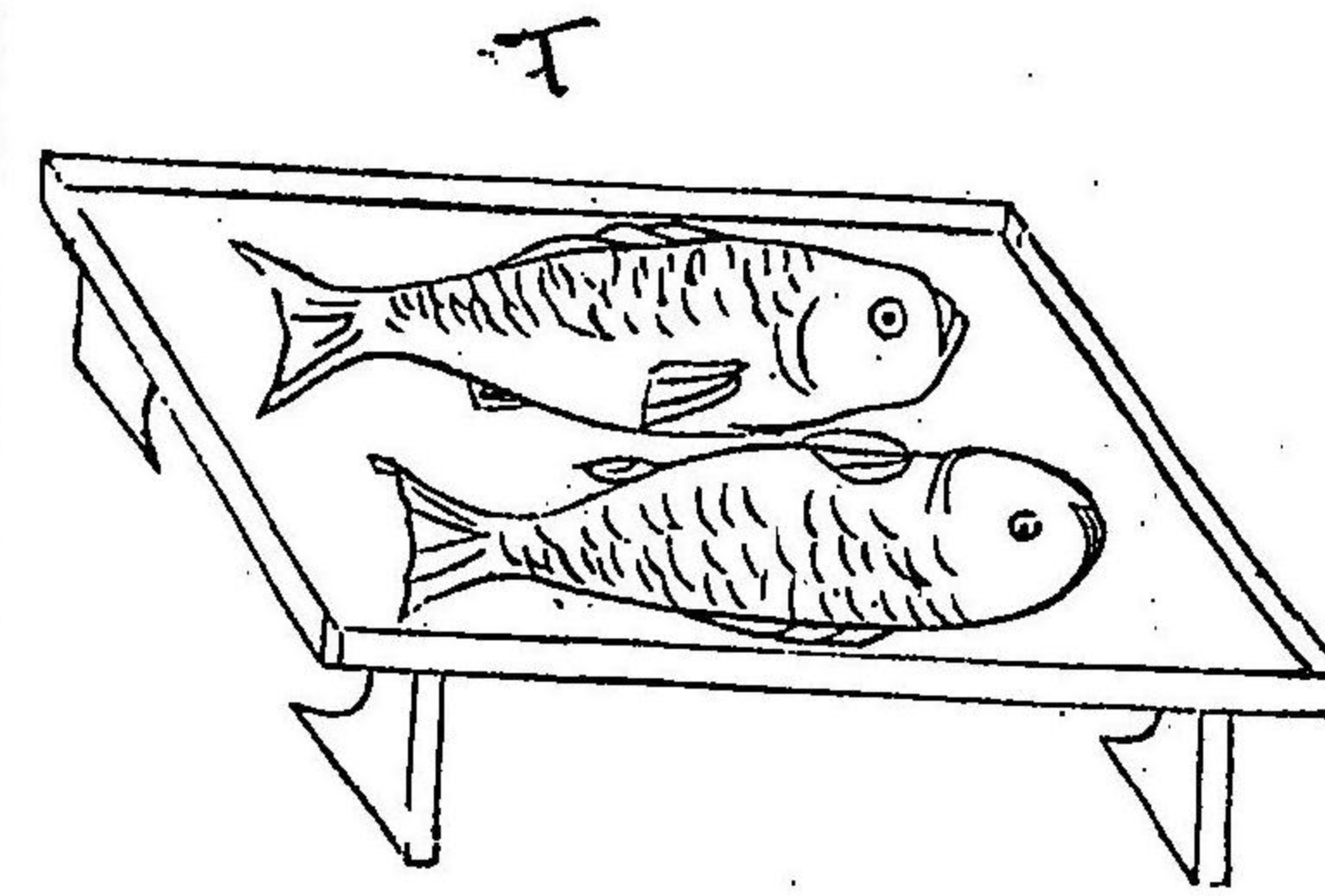


披露するには如此袖を右に
肩を向にありて出すあり

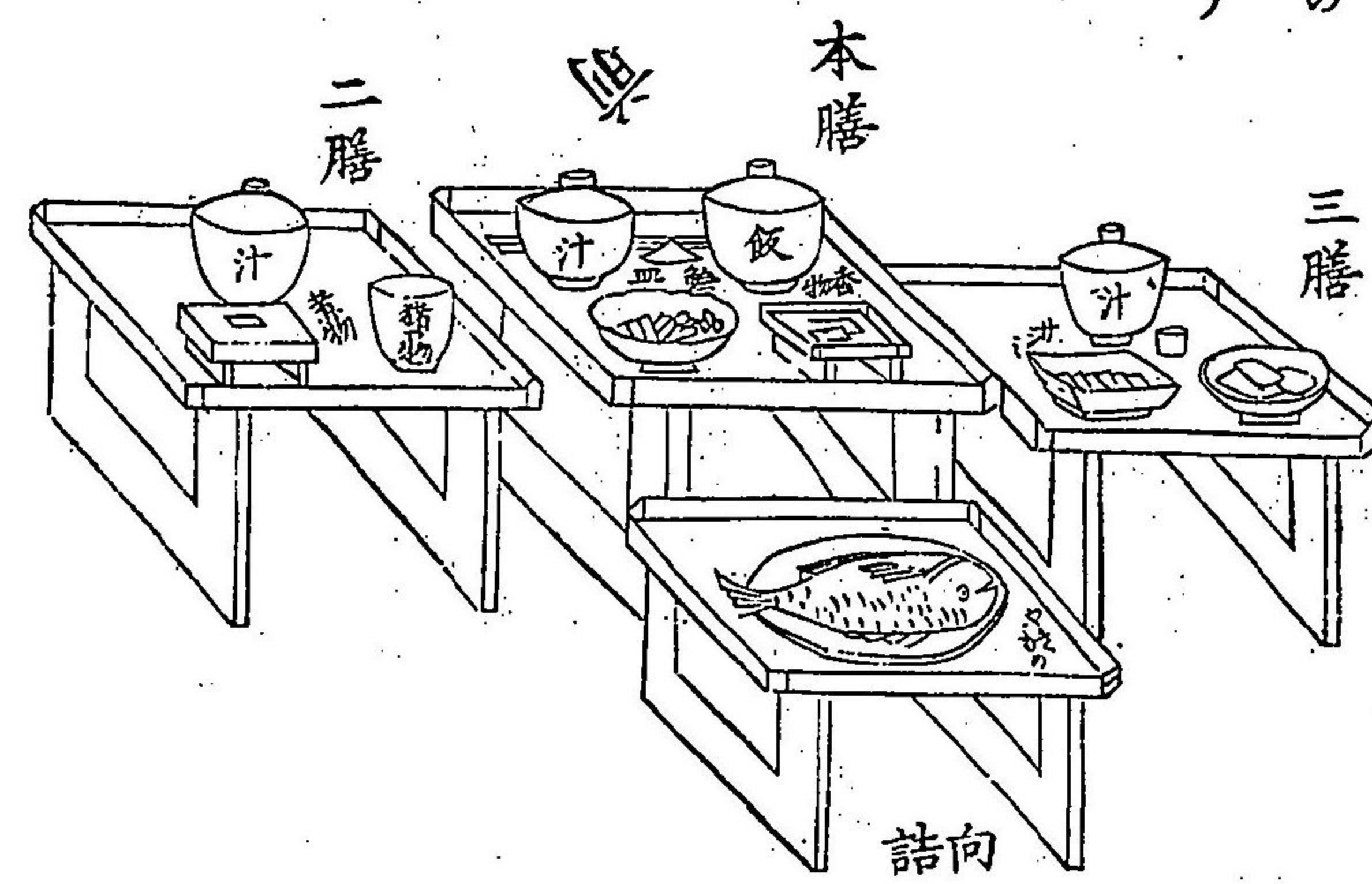
か
い
る
あ
の
す
あ
や
う



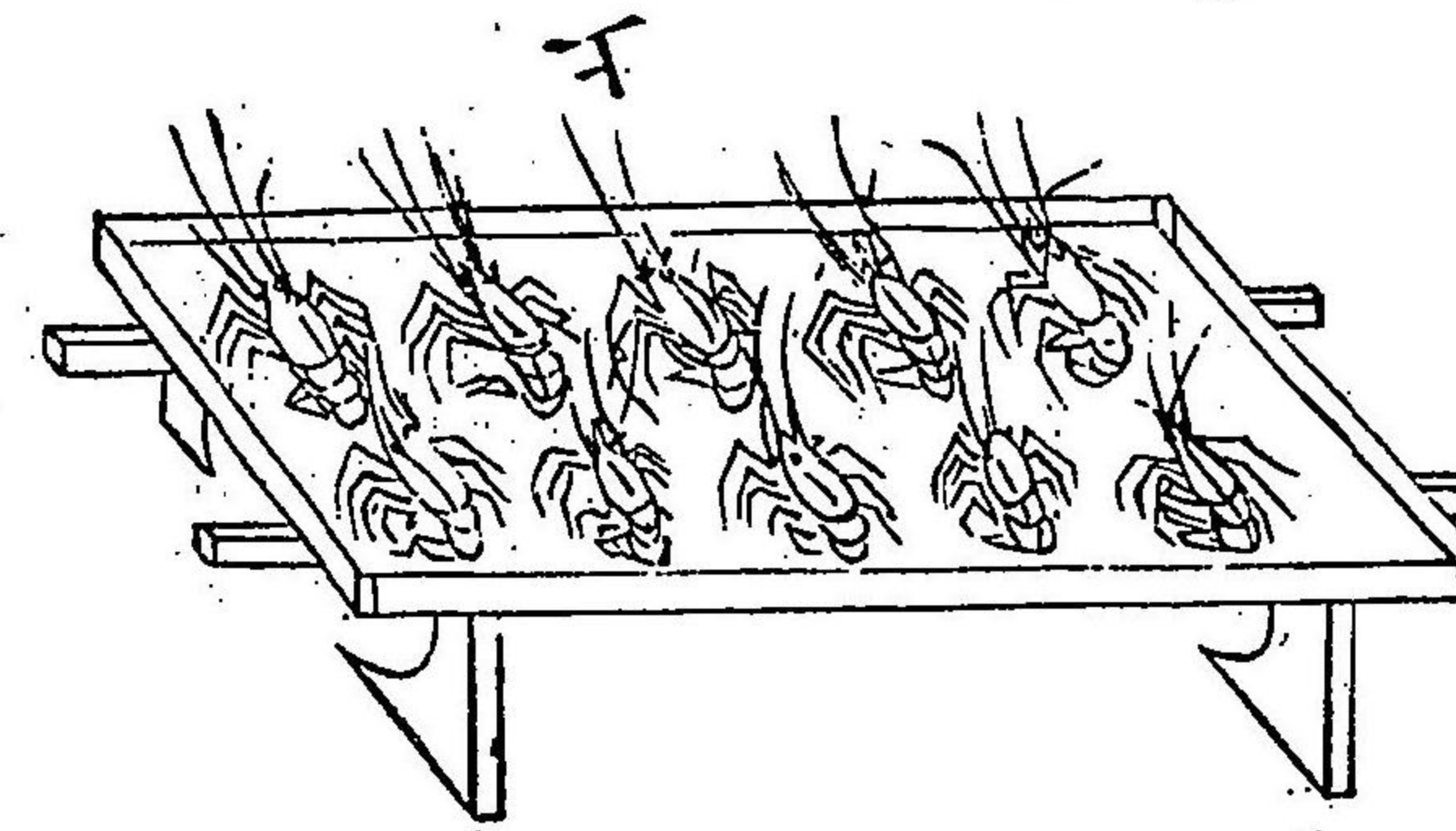
鳥
の
す
あ
や
う



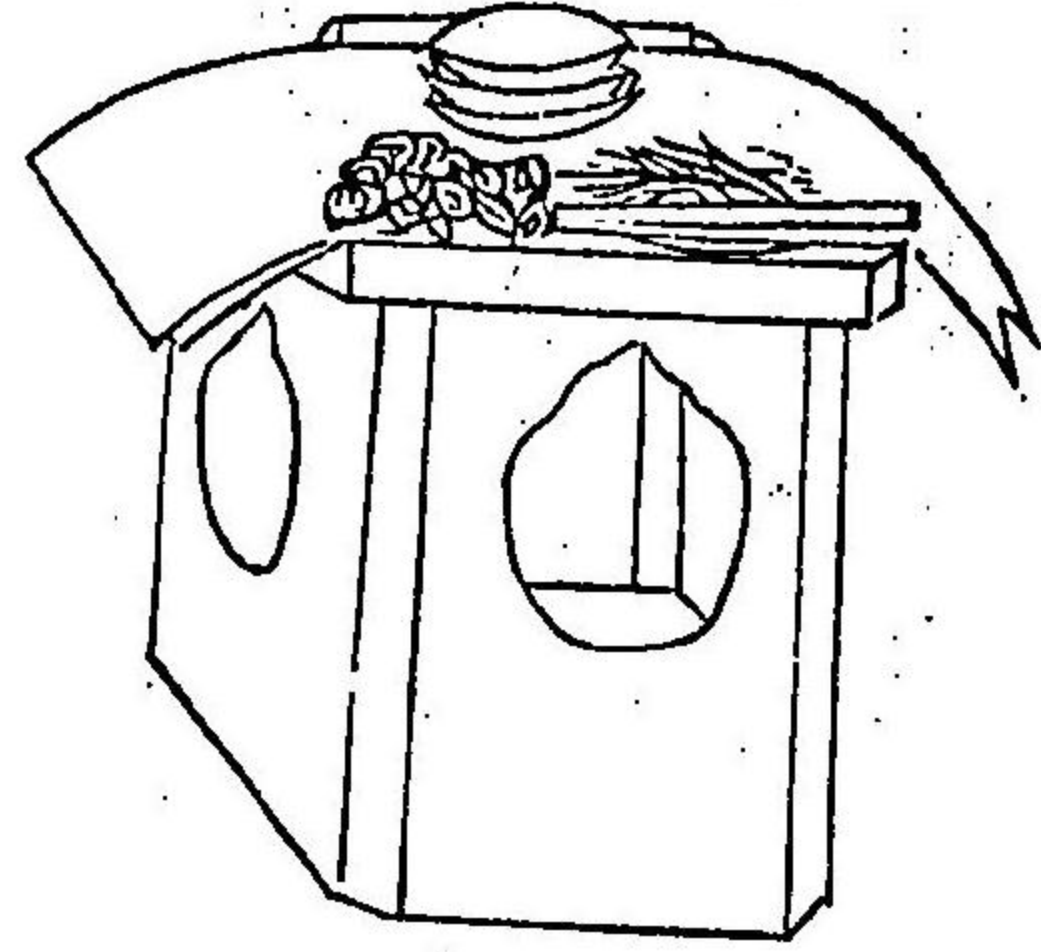
三汁七菜膳の
すゑやう



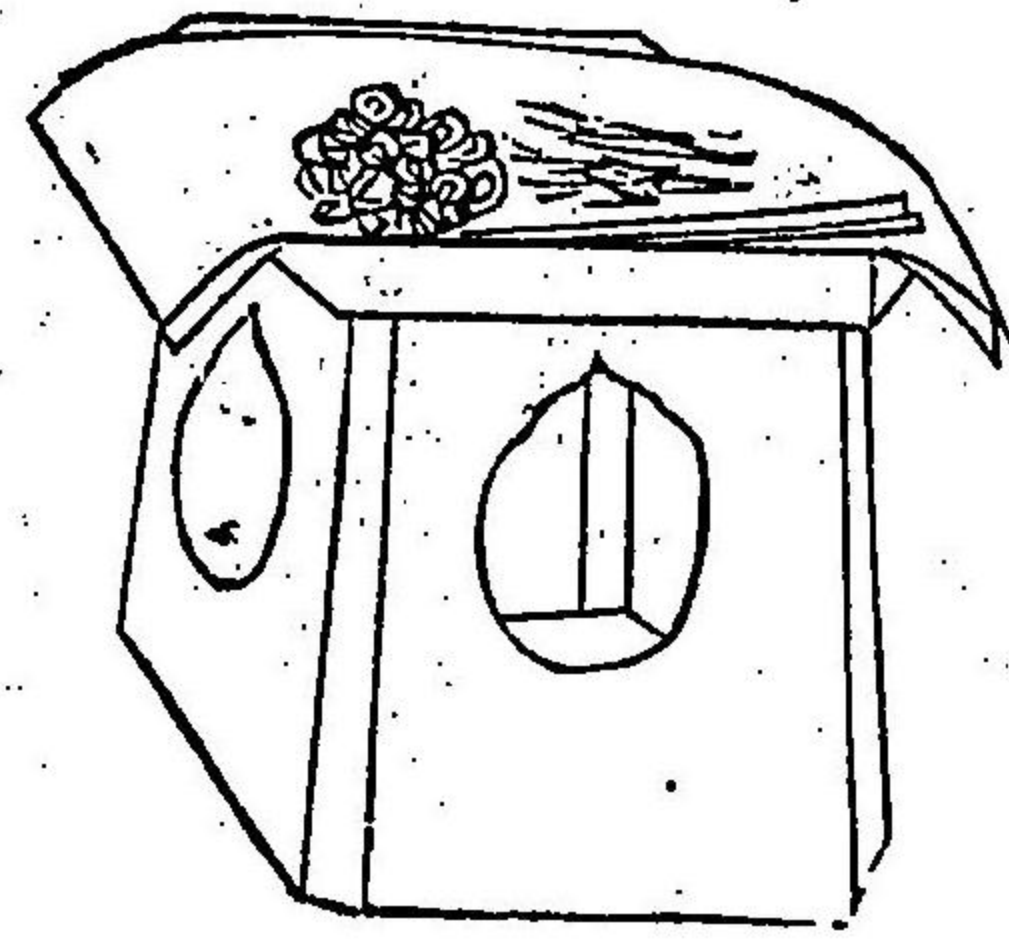
あびの
すゑや
う



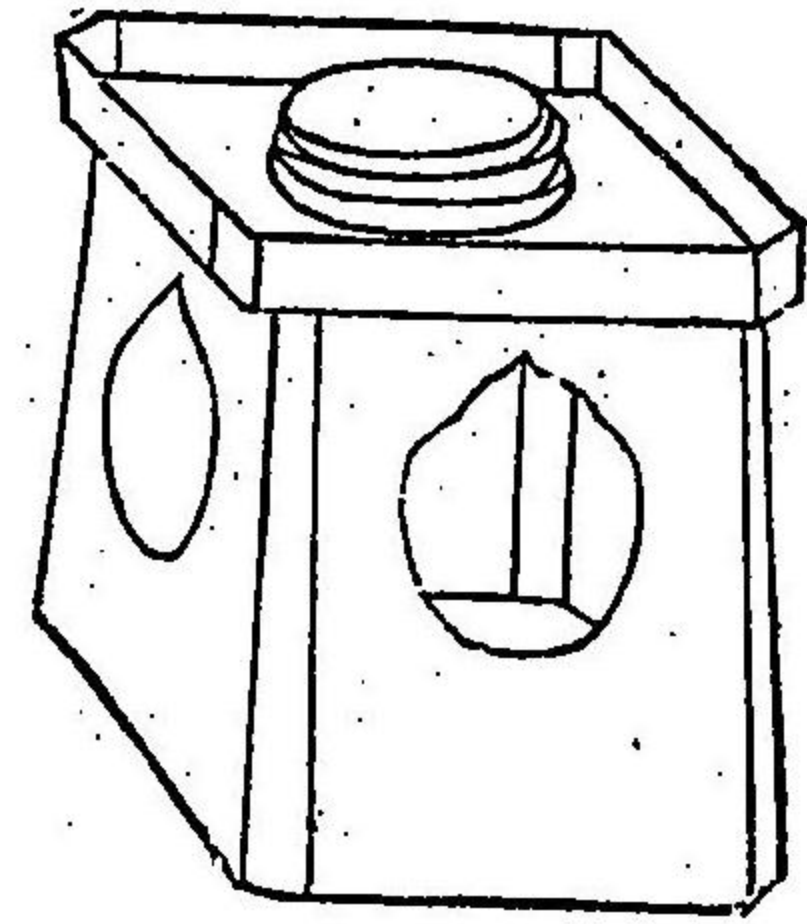
盃と取肴
と合せて
えりやう



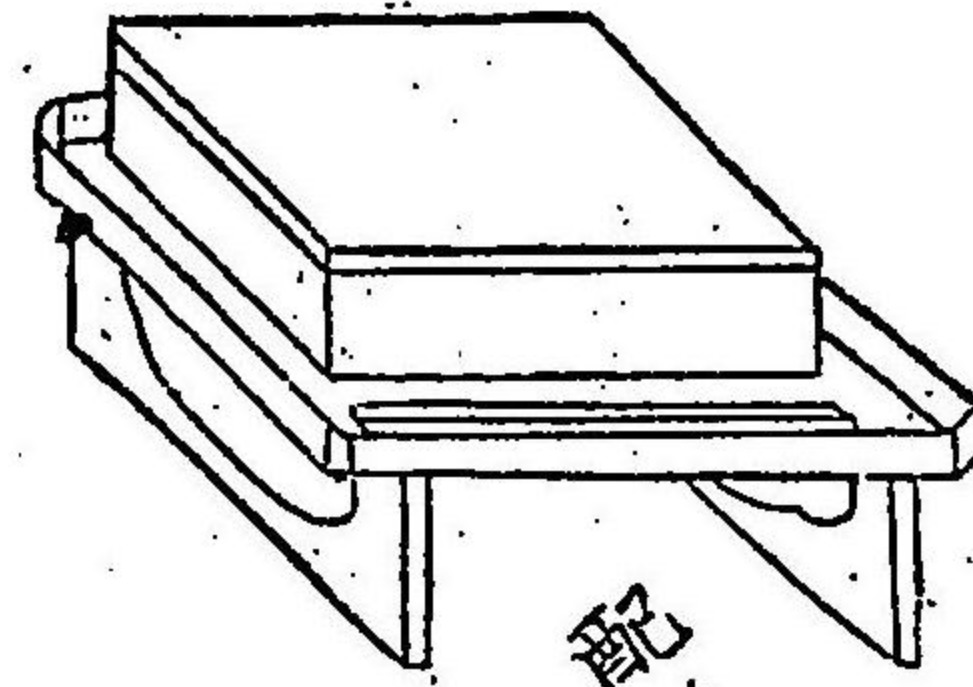
取さかぶの
もり様



さかぶの
三方

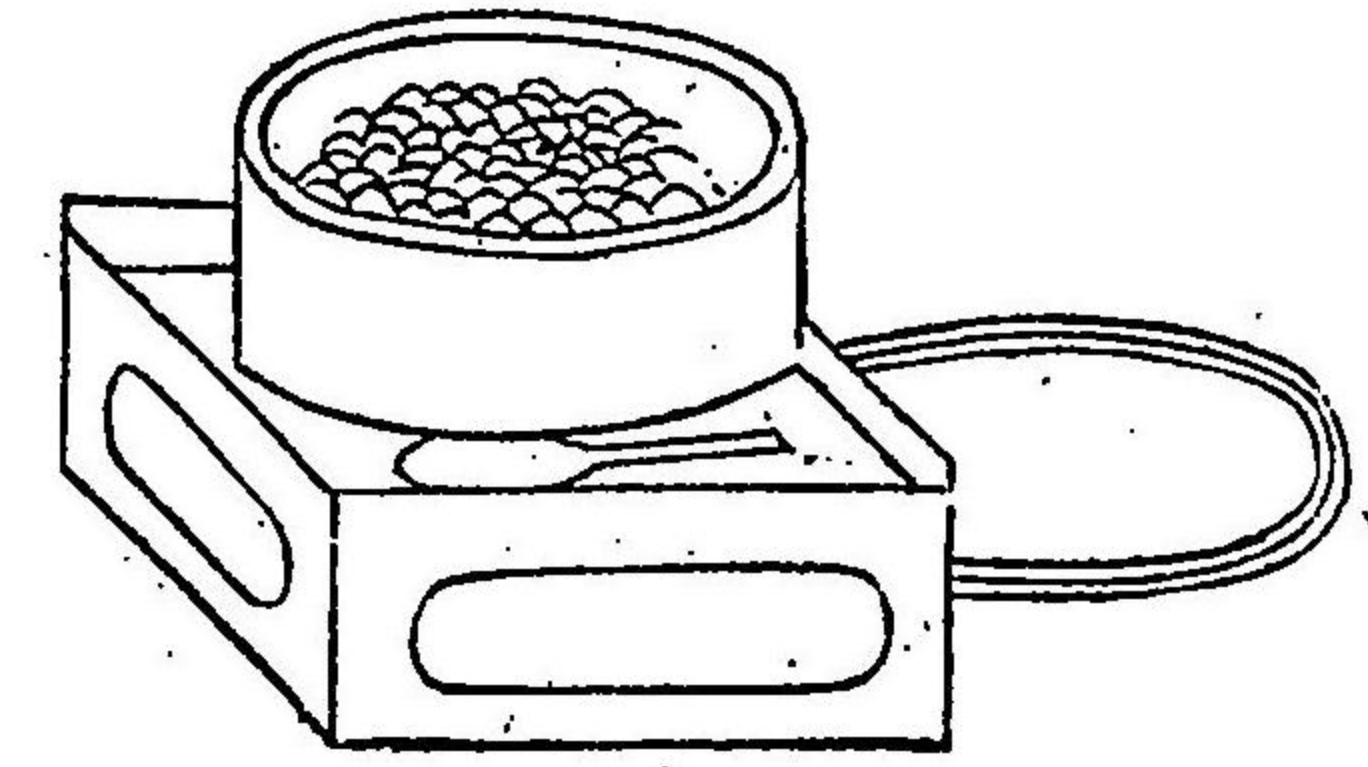


重引の
据様

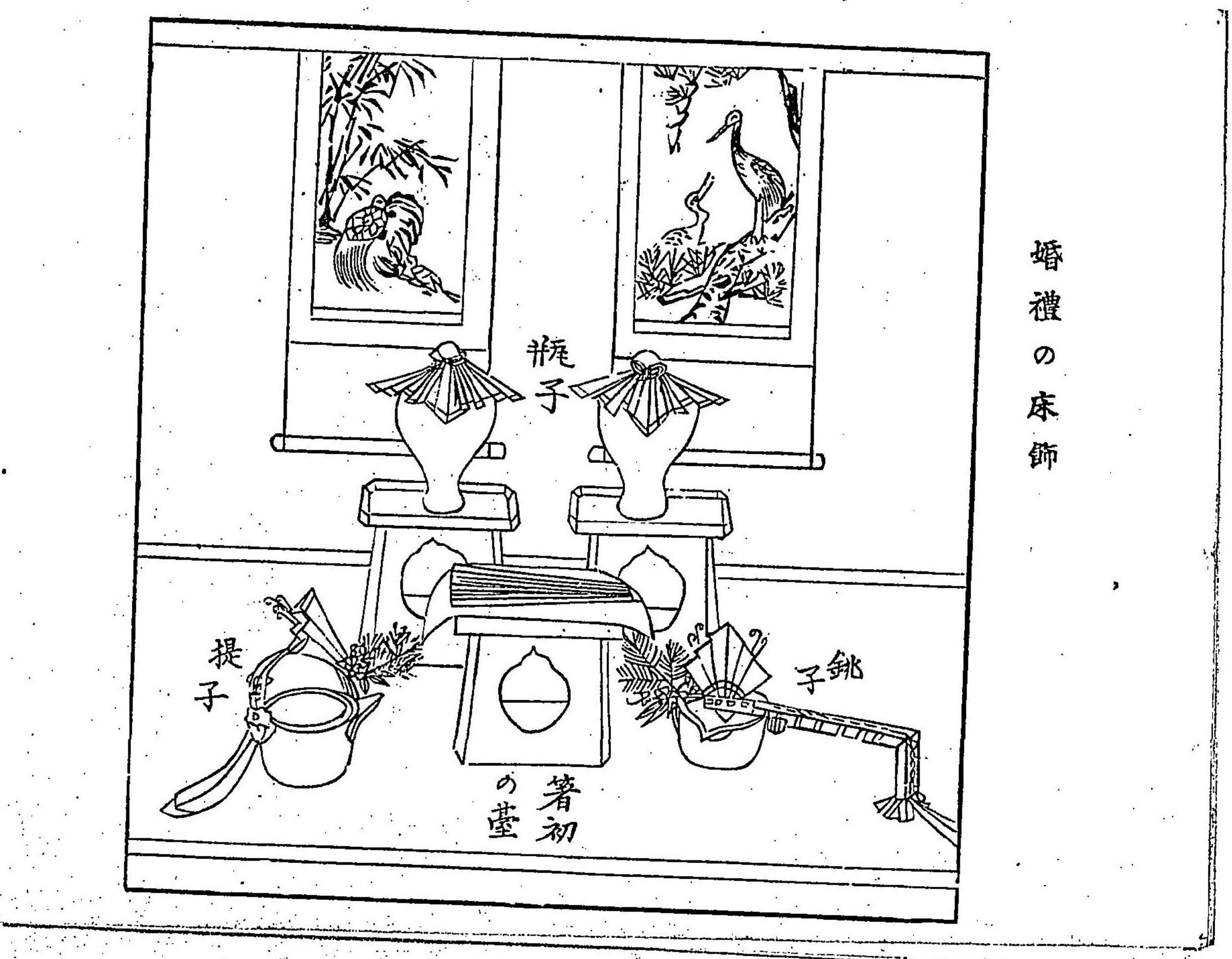
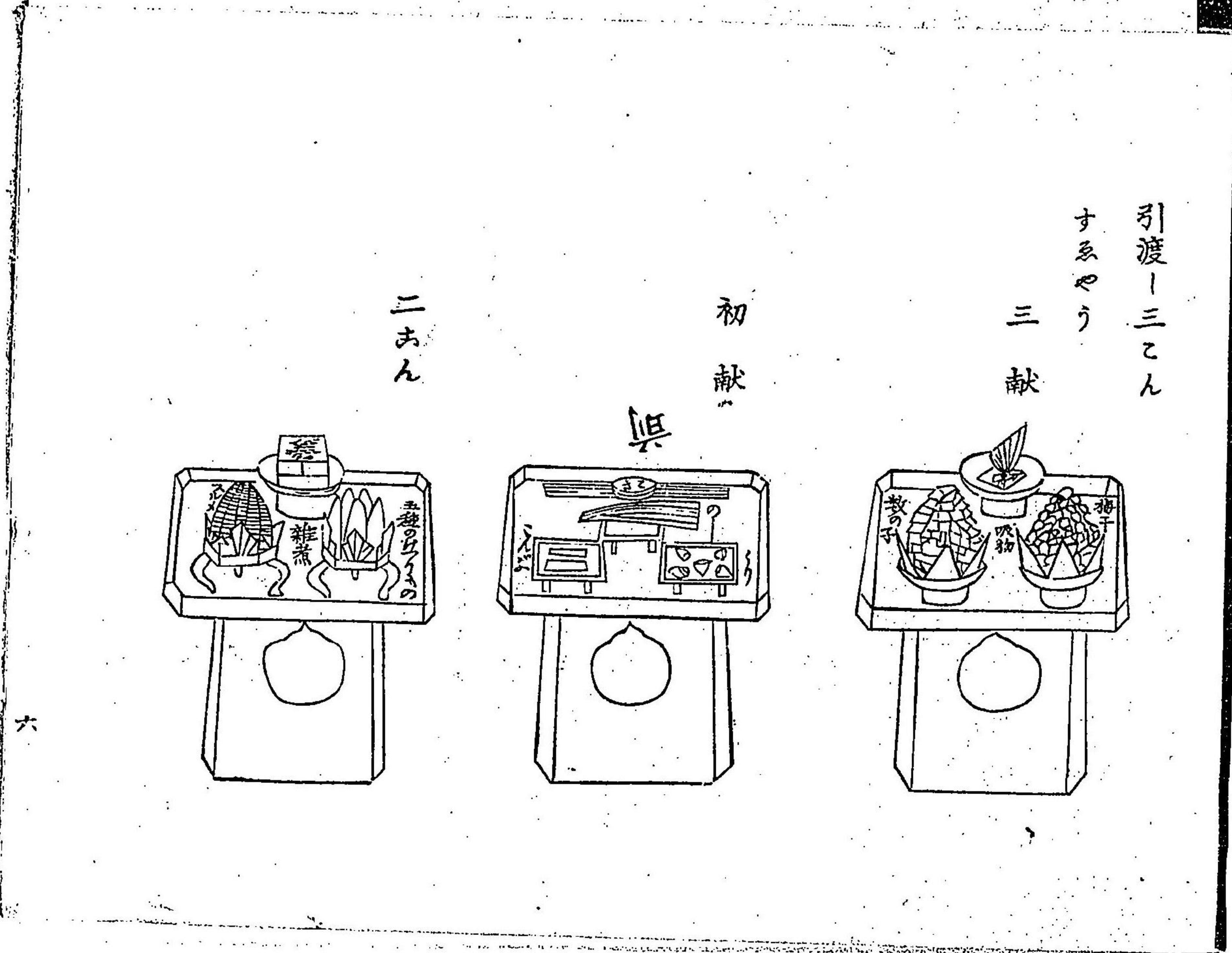


配膳者

飯鉢の
ふたを
とりこる
所



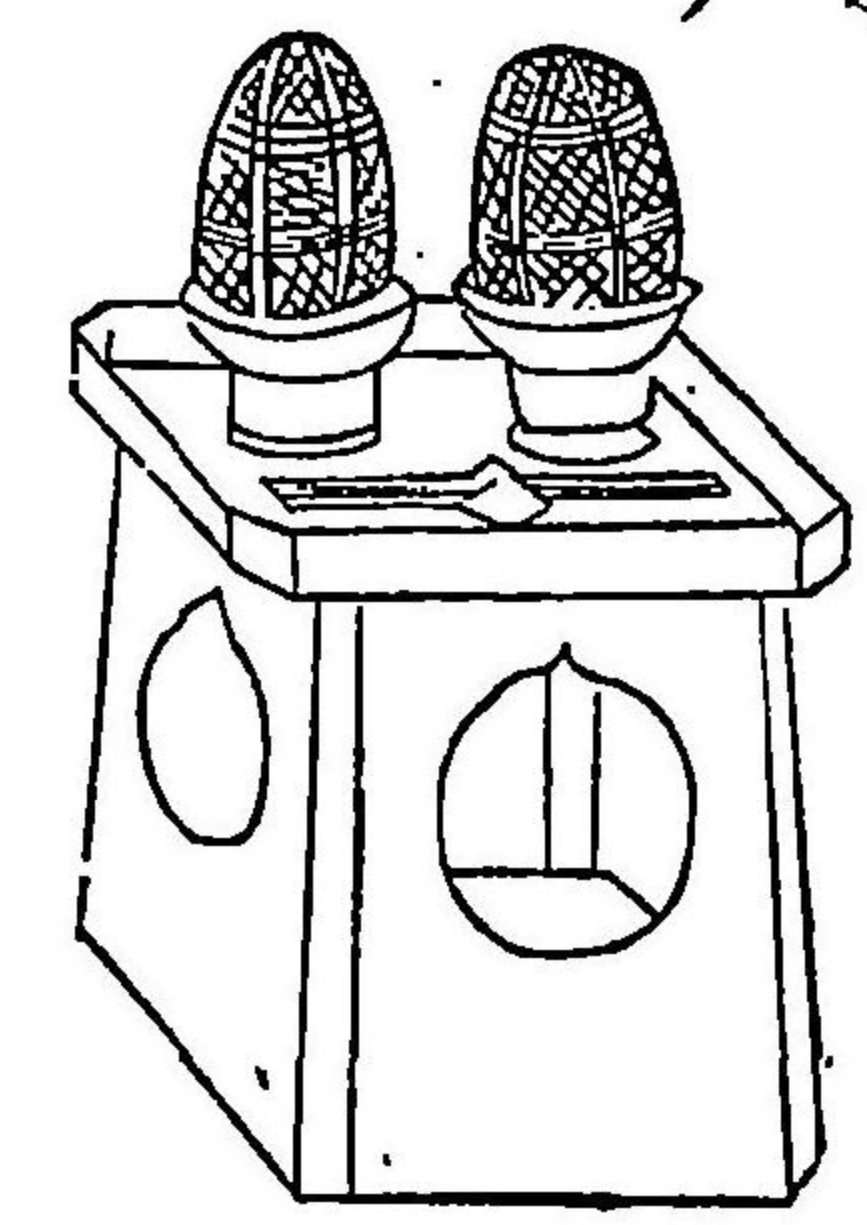
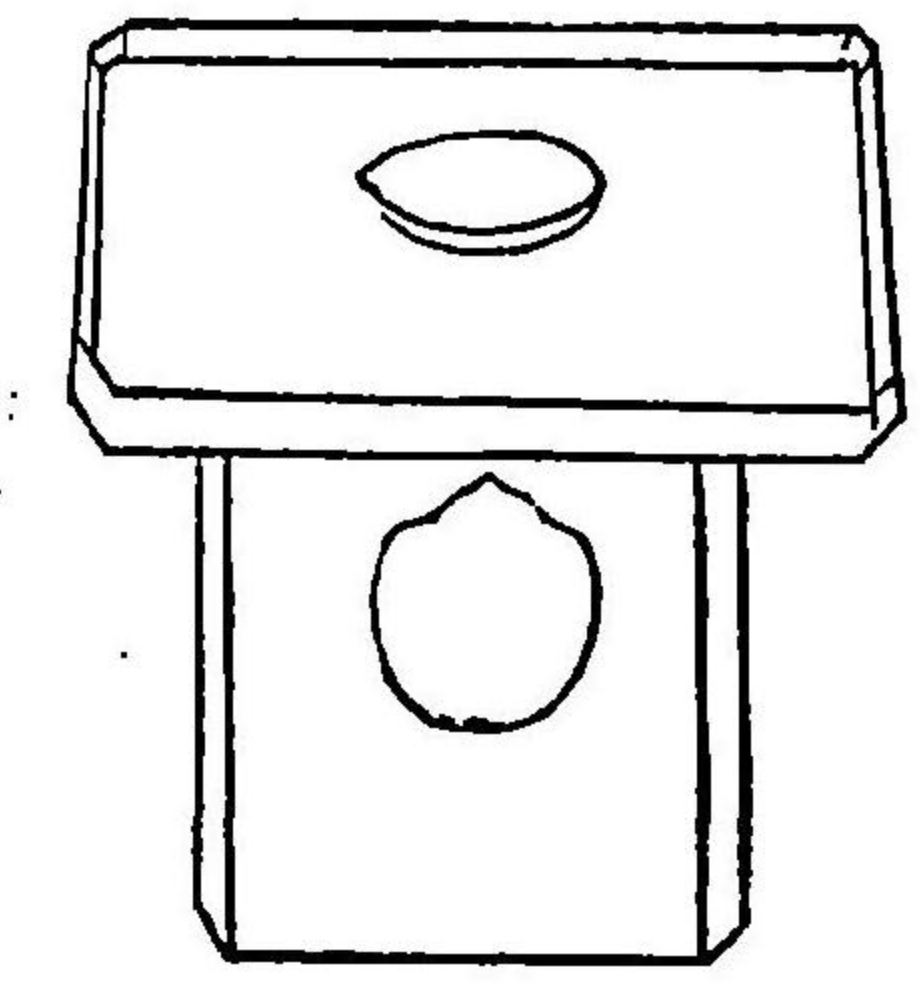
配膳者



下替のいりや

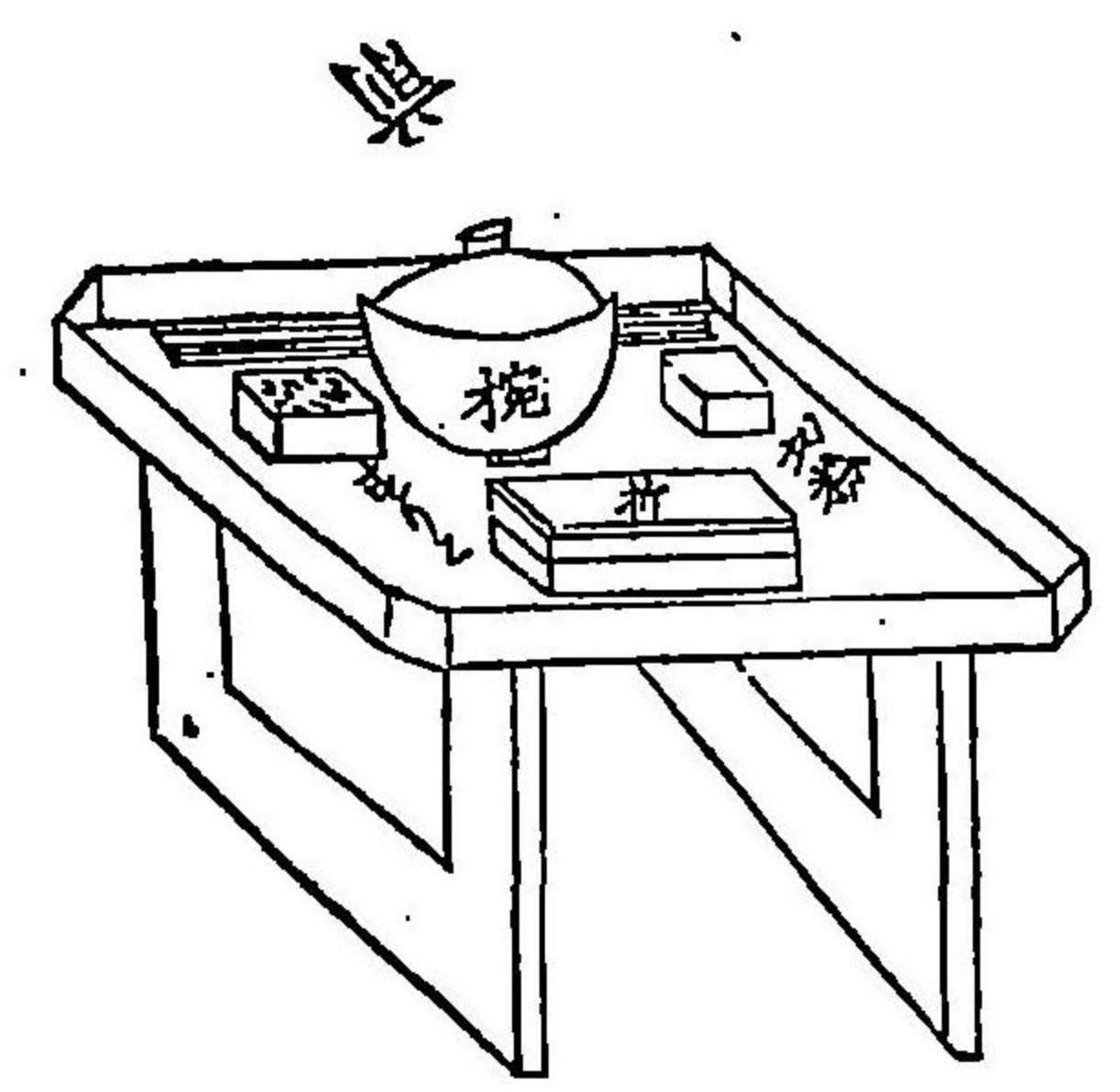
土器の物

すまやう



麴類すまやう

折れて参
らする
たい



明明明
治治治
卅卅卅
年六六
七七年
月十二
廿二月
七十月
日廿廿
再再八
版版日
行印發
刷行刷

定價金三拾錢

著者 静岡縣平民 中津衣江
當時山梨縣甲府市
大切十七番戸寄留

發行人 東京府平民 坂田安治
東京市下谷區
西町二番地

印刷人 山梨縣平民 山岡清造
山梨縣甲府市百石町
十八番戸乙

印刷所 山岡活版所
山梨縣甲府市百石町
十八番戸乙

版權所有

